

子供を不幸にするもの

山田高校 鈴江 功武

「あなた方は、子供を不幸にするいちばん確実な方法は何であるかご存じだろうか。それは、何でも手に入れるという習慣を子供につけることだ」 1(ルソー「エミール」)私たち大人は、このことの意味を十分に理解しています。しかし、理解した上で子供たちを不幸な状態に押しやっている現実があります。ルソーはさらにこう続けています。

「子供の欲望は簡単に満たされることにより大きくなってめく一方であるから、おそかれ早かれ、あなた方は力が及ばなくなっていやでも、拒絶しなければならないことになる。
- そのうち、あなたのもっているステッキをほしがる。その次は時計を一輝いている星をほしがる。 - 見ているものは何でもほしがる—どんな理由を言っても聞かせても理屈というもののわからない年ごろの子どもにとってはすべては口実となってしまふ。彼はいたるところに悪意を見る。彼の心はねじけてきて、すべての人に憎しみをいだき、してもらうことに対してはけっして感謝することなく、あらゆる障害に対して立腹するようになる。」
ここでルソーがとりあげている子供は幼児期の子供です。幼児期にかいて満たされ続けてきた子供たちの将来がどうなるか、私たちは既にその答を知っています。物質的な豊かさの中で、心の貧しい子供たちが増えつつあることも十分承知しています。そして、その責任の大半が、子供達の側にあるのではなく、大人たちの側にあり、その原因が「社会そのもの」に根ざしていることも承知のことです。

学園の荒廃や少年非行問題を考える時、私は先にあげたルソーの「エミール」の一節を思い浮かべるのです。そして、そのつけが今私たちの手元に回ってきたように思う。先日、小学生の子供が持ち帰った「学校だより」に次のようなことが書いてありました。

1. 石を投げる子供がぼつぼついて、けがをさせたり、ガラスを割る。つねに注意しているがやまらない。
1. 下校時間が守れない。(家でも言いつけたことに対して素直に行動できているでしょうか)
1. しぶとい子供が多くなりつつある。「こういうことをしたでしょう。」と言ってもなかなか言わない。

このような子供たちは、ごく少数だろうと思います。しかし、「素直に行動できない」「しぶとい子供が増えつつある」このことについては十分に考えなければなりません。事実、高校生にかいても同じことが言えます。ホーム主任をしていて一日のうちで一番気の重いのは掃除の時間です。わずか十分そこそこの時間帯であり、たかが掃除なのですが、これを生徒たちにさせるのは大変です。授業中に本を読ませるよりも、ノートをとらせるよりも骨がおれるのです。掃除をする習慣が身についていないのか、掃除のできない生徒が実に多い。教師が見ているからといって、するのは良い方で、見られていても平然とサボル。注意されても動かない生徒も多い。」まして、班の友達にすまないという気もないらしい。かつて掃除をサボるのは男子であり、テニアワン連中だったが、今はちがうのです。まじめで(一見)、勉強もそこそこできて、おとなしい子でも平気でサボルし、女の子が輪をかけてしぶとい。私は生徒たちに「たかが掃除とと思ったらいかん。すすんで掃除ができるということは君たちの生活のすべてを表している」と言う。「掃除ができる子に学

習面における問題も、生活面における問題もない」というのが私たち教師間の共通理解です。

戦後の親たちは、戦前の親たち以上に子供に理解を示し、子供たちと話し合い触れ合いの場を多く持ち子育てに熱中してきたはずですが、しかし、現実には私たちの思いとはまったく異なる現象を呈しています。勿論、子供達の大半が暴力行為に走ったり、非行をなしているわけではありません。が、小学校の「学校だより」から感じるように、どこか異質な歪んだ子供たちの心が見えてしかたがないのです。今の子供たちは知恵の面が非常に発達している反面、社会性とか道徳性の面ではむしろ後退しているように思えるのです。他者に対する非難や攻撃性は鋭いが、自己の過ちを攻めるという素直さには欠けるというのも特徴です。いかなる場合にも自己の正当化を図ろうとする姿勢には子供らしい純真さというものが見当りません。行為の過ちを認めさせて、「今後はこんなことをしない約束できるかね」と問うと「そんな約束はできない。人間だからまたするかも知れん」と平然と答える。当人は、これこそ素直に真実を答えていると思っているらしい。

そこで、「そうでは無い、反省をした今、今後二度と同じ過ちをくり返さないという心構えができたかどうかを訊いているんだ」と重ねて問うと、おし黙ってしまう。

「子供と話し合うこと、それがロックの重要な原則だった。それは今日大流行である。しかしながらその成果は、そのやり方を信奉させるに大変ふさわしいものであったとは思われない。そして、わたしは大人がいろいろ理屈を言って聞かせてきた子供ほど愚かな人間を見たことがない。一人々は、彼らをことばだけですべてを解決するように、言われたことにいちいち文句をつけるように一議論が好きで強情っぱりな人間になるようにしつづけているのだ」 2(「エミール」)

子供たちには大人の社会と子供の社会の区別はつかない。大人は二つの世界の別をわきまえて、あらゆる機会に大人の世界の道理を子供たちに説く。しかし、このことは頭ばかり大きくなる子供を育てることになります。小学生にして、大人社会の本音と建前を知り抜いたようなことを言わせる結果を生む。ルソーは「自然のうちに育てよ」「世の中の慣例とは全く反対のことをしなさい」と説くが、これは誤っていないと思います。現代の子供たちは、乳児期から託児所に預けられ、保育所に、幼稚園に通い小学校に入学する頃にはいっばいの社会性を身につけている。親子の自然な情愛や兄弟間の情愛に触れながら隣近所の子供たちとの遊びに発達し、好ましい人間性と社会性を身につけてゆくというルールが現在では失われています。一足飛びに大集団に入ってゆく不自然さが人間形成にどのような影響を与えるのでしょうか。

子供は大人より小さいですが、自己保存の欲望や情欲においては大人とかわりなく、しかも理性をもたないのです。この自己主張と欲望の集団の中に目が開いたばかりの子供を放り込む世の大人たちの無神経さは、ルソーに非難されてもしかたがないと思うのです。現在の託児所や保育所は年令別に集団を構成させ、部屋を割り、その中で終日保育がなされています。仲よく遊ぶ前に遊具の奪い合いが始まり、力の社会が成立する。大人は仲良く遊ぶことの大切さを一生懸命教えなければならない破目に陥るのです。私たちが子供の頃にあった、年令構成の雑多な遊び集団に存在した良さというものが、そこにはまったくありません。あるのは大人の知恵の介入だけなのです。更に、最近の子供たちは、同年令

の、しかもごく少数の子供としか遊ばない傾向にあります。年令の異なる者との遊びが実にヘタであるし、知らない。本来なら、遊びの中で自然に学ぶべきいたわりの心や思いやりの心が子供社会の中で育ちにくくなっています。勿論、託児所や保育所にだけその原因があるわけではありません。小学校や中学校で模索しながら行われているグループ学習や集団登下校などがこの補充としてなされているように思います。しかし、本来、自然のうちになされるべきものが、人為の中に組み込まれた時、そこには不自然さゆえの様々な問題が生じることになるのです。

「人間の魂の奥底には、生一まれながらにして正義と美德との原理があり、それに基づいて、われわれは、自然の主義には関係なく、自分の行動や他人の行動を、よいとか悪いとか判断するのだ。そして、まさしくこの原理に、わたしは良心の名を与えたのだ。（「エミール」）

良心が生まれながらに備っているかどうかについては異議を唱える方も多いと思います。しかし、ルソーの言うように魂の奥底には、正義と美德との原理が宿っているように思えるのです。たとえば、私たちが、テレビや映画を見る場面を考えて下さい。私たちのだれもが、主人公の身になっています。時代劇であれ、刑事物であれ、ホームドラマであれ皆そうです。主人公の心に共感した時、私たちは時には涙さえ流します。主人公の悲劇的な結末には、何かやるせない気持ちにさせられます。子供たちが興味を持つ、テレビマンガにしてもアニメ映画にしてもそうです。子供達は、みんな主人公になっています。さらにはっきりしているのは、私たちに共感の念を抱かせるのは悪ではなくて、善なることであるという点です。子供たちにとっても、この点は同じなのです。

この良心こそ、人間を他の動物と区別するものです。西洋の人々はギリシャの昔から「良心に支えられた行為」「理性に基づいた判断行動」「普遍的な真理」を求め続けてきました。それは、「人間の生き方」を求めてきたのであり、すぐれた師の下には多くの弟子が集まり、自然に学園が生まれました。そこで、彼らが学んだものは、「人間としての生き方」なのです。勿論、ギリシャの時代にもいっぱい知恵と学問を楯に上手に世渡りをしてゆこうという人達も多くいました。又、そういう人たちに、知恵を教えこむ家庭教師たちもいました。でも、両者のどちらが、私たちに共感を与える生き方が、これは考えるまでもないことです。

あらゆる知識や知恵や能力が絶対的に善であるためには、善なる意志に基づいてなければならぬとカントは言っています。「頭がいい」「走るが速い」ということは良い(善い)ことですが、それは、「善なる心」の上であってこそよいものとなるのです。「頭のよい」ことを利用して他人をだますのはどうでしょうか。「走るのが速い」ことを利用して、他人の者を盗んで逃げるのはどうでしょう。この「善なる意志」をカントは「善意志」と名づけ、私たちが良心に反する行為をした時は、「自分で自分を責める内心の声がおこる」としています。知識や技術、一般にいわれるところの学問、これらは樹木に例えるなら、枝であり、葉です。地上において、私たちの眼に触れることのできるものです。しかし、良心や理性、道徳性は根の部分です。人前に見せびらかす性質のものではありません。見えないからといっても全く無視するのでは困ります。

枝や葉は何に支えられ生命を保つのでしょうか。この根が十分に育ち、発達した上に、知識が貯えられ、技術が磨かれているかどうか問題なのです。木の枝や葉のことは学校

でもって教えることは容易ですが、根の部分についてはかなり困難を要します。それは、本来家庭において、地域において自然のうちに培われる性質のものなのです。仮りに、子供たちが言葉として理解できたとしても、それは、もはや社会生活上の知恵としての性質しか持たないものになってしまうのです。私たち大人は、このことにもっと多くの注意を払わなければ、魂の抜けた子供ばかりを育ててしまうことになるのです。

- 最後に -

私は教育論を書くつもりはなかったのです。生徒と接する中で日頃感じていることの一端を吐露してみようと思って書きはじめたのです。しかし、「エミール」に登場願ったところに、既に過ちがありました。ふりあげた刀を下せなくなって、長々と意味のないことを書いてしまいました。

問題点を指摘しても解決の方向を示していません。ただ、これを書きながら、私は「人類はこの分野において進歩していない」と思いました。

「エミール」は今から二百年以、ヒも前に書かれたものですが、読みかえすたびに胸を打つものがあります。「エミール」はフランス革命前の貴族の子弟の教育論として書かれました。ルソーのいう良い教育とは「悪い感化を及ぼすいわゆる教育と、さらに悪い影響を及ぼす社会に由来するいっさいのものをしりぞけて、人間のうち最も純粋に自然性をとどめている子供に、その本来の自由を自然に帰えしてやること」なのです。

ルソーの時代と私たちの時代とは比較にならないほどの隔りがありますが、教育の本質においては変化はないと思います。そして、今こそ子供たちをいわゆる教育という名の下におけるあらゆる束縛から解放してやり、人間の根底に宿る良心を育てることに意を用いる必要があるのではないかと思うのです。

(この原稿は、PTA の冊誌用に書いたもので、道標に掲載していただくのには気がひがひけ」ます。編集部の「何でも構ん」「是非」の催促に臆面もなく提出したものです)

(参考にした書物...世界の名著「ルソ - 中央公論社 -)

- 1 「エミール」 P394 中央公論社
- 2 「エミール」 P396 中央公論社
- 3 「エミール」 P490 中央公論社